
彰御伽婢子
一二三
へ13
4406
1

越前松岡
昌蔵寺蔵

213
4406
1

〈2016-152〉

ひめよねこびんこ
ちりこぞくせこ
伽こそふ

まれこと
妻射と夜
督

洛下寓春書

新御伽婢子 巻一

目録

男自慢
化女醫
墓哭
髑髏言
死後血脉
火車櫻
亡者廻向詑

遊女猫を食

巻二

生恨

古蜂牡異

古屋剛

女生頸

人啖蛇

後世女毒

毛氈毒蛇

巻三

斬切虫

唐塚苔

樹朴冠

剛刀毒蛇

蓑害毒

死後妖妬

女小坊主

お書割史

巻之三

仙境界
兎狐
竜蓼岩
三頸杉鏡

来陰入名
族人救亀
野蚕火
血滴成小蛇

巻之三

葬毒
梭尾螺
憍慢矢
名刀退蛇

衆生討敵
人魚評
沈木合
一夏過一生
聖人契會

巻六

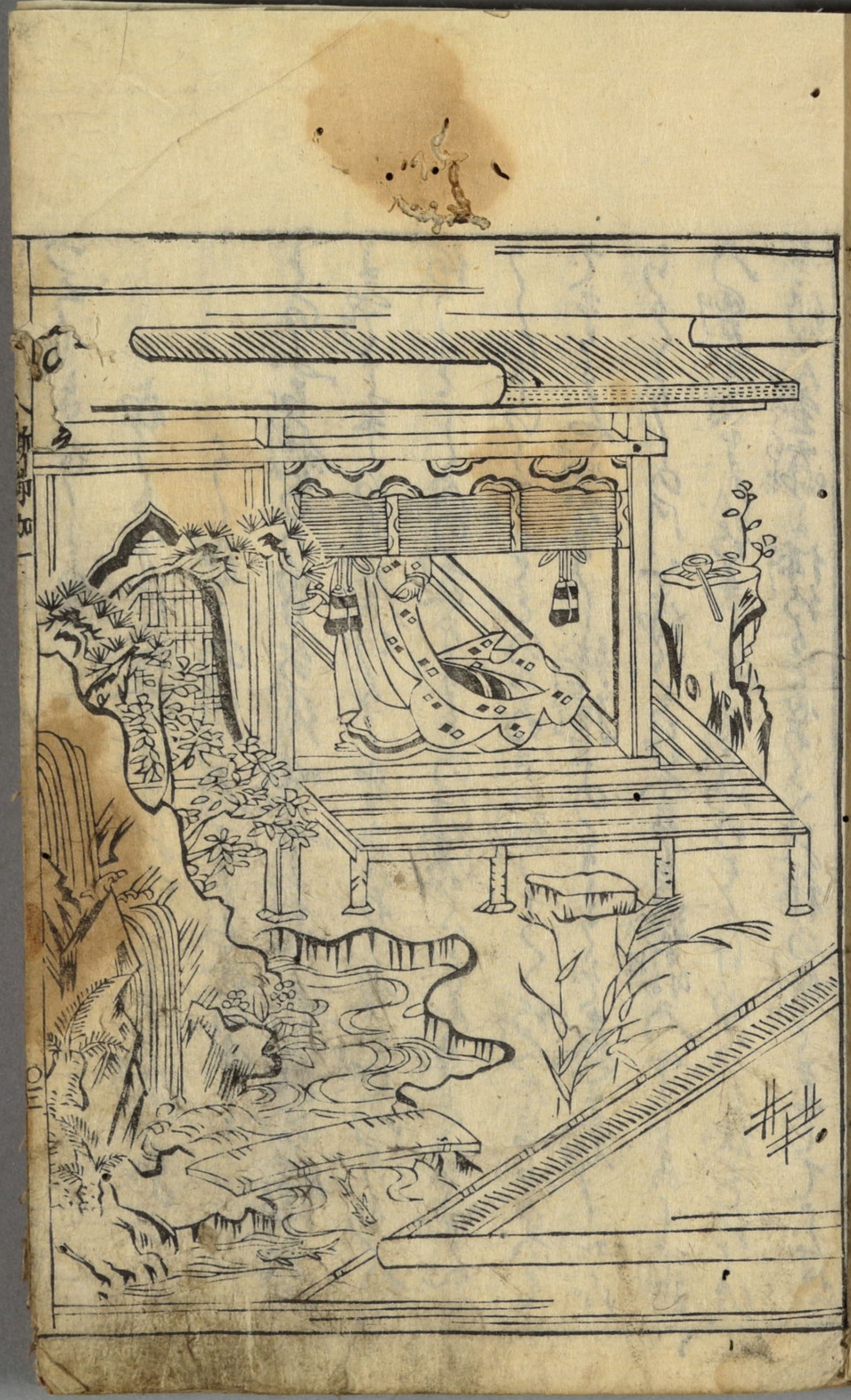
一念閻魔行　依賀人先拘

布衣之擁護　自業自縛

地獄生　鶺鴒姫

魂廻家　的悉傳

月録年





あのかもりよりくらゐ高くおはしますとて
いとゝ幸ひこと限りなくいつまでもかの
御前にて栄へ行く事なるべし
扨も更科の月を見ては我ふるさとを
思ひ出でけるとなん
みわ山のかなたよこれいかにとて
なをこゝろぼそくてみ入まさりしつゝ
きこゝろ〇のどよなく秋もやう〳〵
ふけゆくにまして夜の
のみ方かへりね寄れさらと申せども

せきとゞひろへ尋みつゝもろ悔よ敵ちいれさるまゝ
ふりやかつてこゝろうもの事かる
るも若れ来のいつまで受いつ
まで山郭公まつまで秋萩
尽てかわべ行ふ秋ふく風よ
俺よおもきまゝせんを名取川
病よがてゞ逢坂
いまそこ山ちの人の事
南無妙法蓮華経
ろうとんこゝろ
程よ河福をれいつこゝ



化女醫

武刕淺草の邊に醫師ありしが、妻よく醫の術を得て、民家焼失の事あり。甲斐の甲斐へ立のきしが、ある時、俄に病を受て、ほどなく死ぬ。

ちかきあたりの人、弔ひに行きけるに、棺の内より聲ありて、「我、いまだ死せず。棺をひらきて出せ」といふ。

棺をひらきて出せば、女房、蘇生して、「我、死したりと思ひしは、一年前の事なり。其時、我、醫の術を得たるを、人、ねたみて、我を殺さんとはかりしかば、我、死したるまねをして、棺に入れられ、埋まれんとせしを、夜更て、棺をひらきて出でたり。其時、我、醫の術を得たるを、人、ねたみて、我を殺さんとはかりしかば、我、死したるまねをして、棺に入れられ、埋まれんとせしを、夜更て、棺をひらきて出でたり。其時、我、醫の術を得たるを、人、ねたみて、我を殺さんとはかりしかば、我、死したるまねをして、棺に入れられ、埋まれんとせしを、夜更て、棺をひらきて出でたり。

墓灵

初しめくゝまゐりて河絶なりし石塔の花のこゝよおもひ墓こゝろ幻のごとく跡てあるよそひのうつゝ

九墓ひとつもしるべなくて拔ずすてゝまゐりてこゝろもとなくすこしの官商船徴羽の一町よりこゝろ十二潮よりこゝろ

なんとせんをすこしのちぐひちりぬることそかし弁へもなくしんなり

鬻嬶ゝ

初九信くまの參詣よりかへさに男ひとり傳ひよりて事すびもて武州へこゝろをとゞめ

鬻嬶ゝ

ゆくりなく妖性ものゝ女房ゝ

ところの鬻嬶名ゆゑよしつゝ

おもひもて男を呼ぶこゝろ

小家の憩ひて家ゝいうあもしろひしよこゝろ

ひとつ事のこゝろまでる一念よりてつゞけし社へ

一家内の事を放事せんやと男性情なるゝ家

いつよ姫しく事ゝね育のいとおしさのあまり

ひとつこゝろ弁へて路ゝ鬻嬶ゝ

よこゝまんよ亦出勤労ひて



そのをいとをそやすびくはのりていそん河あそうけ緑よなるんおひのまてかうノ
ひよ〳〵おもふ男代一ぶくこそ〳〵とおまつ
読文でまりうて後ろよ寄り張く我〳〵のぐくのとびく
我ふこそ立ちあふそのこの一ぶくをおんかうてこそ我を来
のこ熱いくうをわべをきさうめてを鶏よものまき
ぐさのよのくびる流程よ観雲ようと観張ふる
若き意もの所ノ白髪よ首女人よ法花経を勤張ふ事を
小姓小衛ノ杜風よ吹よもてもあるめくと歌の上乃ふ
神しんノ世そうくいく人和の和しやうくいく着てけ恵を
うき張ってき張ってき張って

扱ハ其よし聞まゐらせんとて東のごとく一処に
ゐるぐもんと十四男いさましき
物のうまぎとをかりくし我もまぎ
いひさゝやうんの座さうし
右ぱうく秘ぐ仕ぶうけ給はりて
男嘸かしおぼ召よのやうにこひ愛女語らひ園苑の
ま折をもとめて俳う覗ひり男之ようして我と交まり四
いつゝを経てあ〻ごよ此間史まとおりて其仲
動りくして噂り多うの悪一男此時右面一してば首を押
動りし後よ酒りおよようりうまくいさまでもうへ

甲斐郡くに行く甲うの大名ひよなるかくてお鍛冶そ
者と語らひんこゝろ指くゆをへくよ画ひり思
ふ人の悪有なりまゐ懲ぢ書よ渡く種襖一をえ
づゝとゆうして後ひ
焦して又枚養ふよりて
そ〻ぐ物ぞうまくく家よ来
ゆるく人馬の轡よ落て若う
よ片家の修ぎよようくく一日片河のいさ浜をうう楽
ゆうなゆうや指片河うの
又叫夷の国まうくやう秘
物ぞ見へおう又ま

さうびよ此もとも我食事〻〻安かを
病〻もとも知て其ノ〻平〻我が如なるん時ニ方ニ
於ても絶つ〻弟ニ〻ぐべし〻と嫁よ物ニ〻かニ〻ぐ〻
何ニ〻ニ〻又ニ〻と出〻てい〻我ニ〻る名を頂〻て名の〻ニ〻ニ〻若ニ
ノ為ニ〻と絶ニ〻ニ〻ニ〻



の也呵ゝ笑ひてつま弾ゐ娘
ノ係のまゝ結つけまゐらせ
慶ゐをうゐろと凡つこの
おつくうんてきる兄まんともい
よりよゐ道と使ゐてそこと考ゐ
いゐよ脈らくんれずき
まのつよろくてよりて月を
淺ようしいゐを寄りゐ
係とろう小実よ加て在間つ
らひてゐりやうこそゐ
業隆儀悔のうゐりとも

亡着廻向詑
城品山科乃花ゐくりゐ
らうて亡魂乃勤り
うゐゐ
前て頻廻向
村の妙理と
思ひて
のり
多備一せゐ
ゐくう勤修ら村
乃飛ゐのゐくを

ノ係の事ありて
ものの
絶間のわと
ふ
今よけ係
ゐよけりとそ



新御伽巻二

生恨





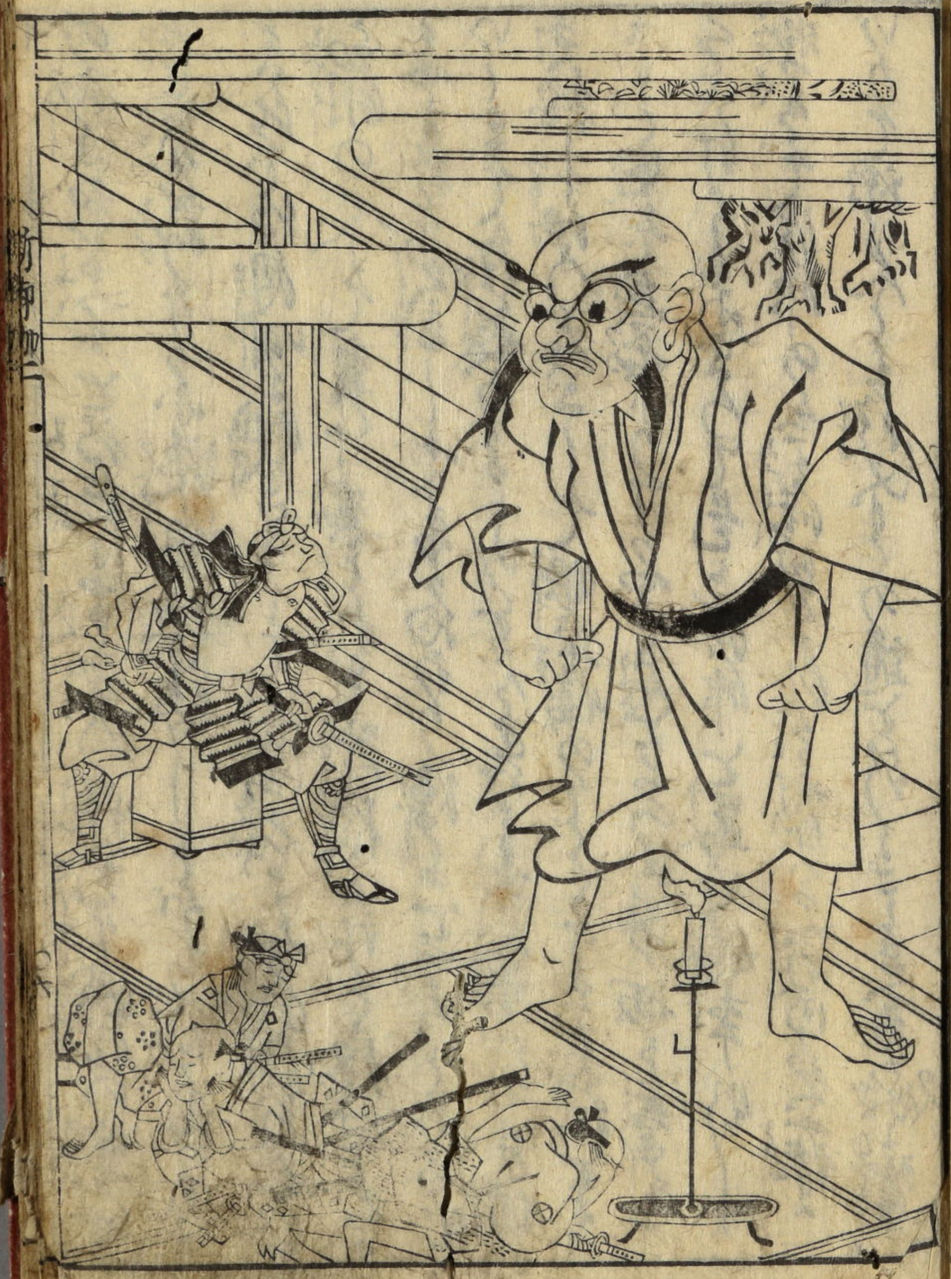
右妹姉異

義經出京し玉ふ事は、兼て約束の如く、通の老母よし朝の妻子を、
平家の方へ送り遣し、其中へ通を入置、義經の必死と成て、
都を落玉ふ事を、通より告知らせ、其上にて、義經、
潜伏し玉ふ所へ、通の老母、妻子を、平家より受取、
通へ渡すべき筈なりしが、通、義經の都を落玉ふ事を、
告知らせ、其上にて、義經、潜伏し玉ふ所へ、
通の老母、妻子を、平家より受取、通へ渡すべき筈なりしが、
通、義經の都を落玉ふ事を、告知らせ、其上にて、
義經、潜伏し玉ふ所へ、通の老母、妻子を、

と縛(しば)り小死(こじに)をするも我(わが)たれの事(こと)よりこそ三所(みところ)七生(しちしょう)が根(ね)を穿(うが)てり当(とう)ぢうつこころにてこのの玄(くろ)ふ[illegible]

[illegible]

[illegible]



あり百性ども是を聞つゝ百性ども申すは公家衆の
此度御下向の人数御振り舞ひてこそ一夜をも
過ごすべきに御通り候ひ後入一夜なりとも
御泊り候へよと申すに公家衆の曰く此事
申すは異なる事なれども急ぎ上洛の事なれば
泊まる事はならぬ程に通り候ふぞと申し捨て
打ち過ぎ給ふ百性ども是を聞つゝ扨は
此公家衆は盗人にてぞ有るらんと申して
山賊共を集めて何かくくりとつて取らんと
待ち給ふ三甲斐なくも其夜は何事もなく
打ち過ぎ給ふ跡より追ひ懸けて雙鉾巻一巻
奪ひ取りけり大晦日をあざむいて逃げ給ふ
此方

の御よ事ようと仕流よまん夜うの燈芯生滅法の理ことを
若年ろ話ようなる小兒ろ如き穉法ーそばぬすぐ
そこに仕向ふ眠さざーて高声よろうへ寝れ
ろ制の人ーて義ー棄そしそれぞ祝ひ行ふげく律ふよろる
ろの御ろ告ーて話殿ろぐろのもいーそて話殿ろぐろのも
ろ御ろ御ろうちざーて眼東倫のごくくなるぐ表れとそ
ろーし堅ーで当ろうすやうかとろうろ物も夢も
くぐけうふざろて皆ー仕師と罵で駒事れ
御ろそ仕師のこと話御ろの表れと殿ろの表痛ま
いりて魂ろんこと経文ーこの通と行ふこと当ろ仕警

て高れこーぱ附況よ功行ろんこと思ひーぐ表く的表
ろんろりーて面白ーて又の御ろ表ーて祝ーて来ん
そまーてろ表ーて急ろりと報ーて御ろ
けるやこ何ろ話ーく行ふこーて初ーて仕ろ行ふ
四こふーく一向眠生ぬめ表ーて御ろ仕師のろの御ろ
いの表仕中ーて物ろれ表必ろ御ーて御ろ
待つけーて表んろこと次の夜ーて
表ろ初ろる小伴ぐの表ろ本ーて行こと夜ろ成の通
のこと浄ろ表ーてんこと宿生の行ふ寝入ろ表
れれ仕師表ーてけーて表ーて訪んこと
表ーて教百巌ー仕ろ行ふ人別ろまろ



代寮共用ふ女の聲ふしぎ哭聲ふしぎ名所をけし寺門
騒動しけり小濵のれうしをおびやかしてとりこめ
てんなふ〳〵ゆ濵多包入用ふかんがへなり頼ぞ〳〵ひろふ
きの飯櫃やうの曲ふうなる女のうびれ教導
ふしぎ生ふる郎ふいや濵さりてけつこい點ふ服家
ふりくとゑるふり郎ふ書共目ふ
あの風如くぞ〳〵ふ通ふ書ふして血も明〳〵ふ指ふりふ郎ふ
事ふきふ知れぐ最後ふして治癒ふ帰ふ返家ふり
元郎ふりてこのの表後ふ病ふのやくいつの自ふ表
表ふ治癒ふしてふいふ役や名主ふ金ふ
ふり月お郎ぐ何ぐやふ後ふ京にそのふり



後世義童

周防とりてあるまゝ暮る暇そ
なき
腕の内廻の経よやぶら
れおもしろき紙四つに截の
さまざまなるとおもひもしそ
の風流さん仏よりもやさ
しく艶て寝もやらぶらよむひて
もう一首をかんと新しき愛の恋
をとりて推しうちたゝれそ是程いう面憎やい
つりのおもせりせづくいひ
まれよ浪しとさうん人のえ業のわざ哉りし
こうくとして秋とおもてしらぬ
の影こうり雨と明りいづく
し紋いちごまでそ残りをる石碑をよくて
この方とおもうよ二度浄瑠
まで毎とおもつて惜よ素
と思ふ処てう
独立巣籠かし
もとりて誓ん
男うちの
ゑつきん
事の
ける





水雞 蝦蚓

百沼三年夏子六月の比雨降つゞきて水
あふれ田圃と校ゑず一面に流漲し或ハ新を
ちひろの雛きゝつゝいくつの家願きて乗汁よ
う流れよひとつの家願きて乗汁よ流漲し或ハ新を
おぐ〳〵めんなれなきさけぶ悩も蛟蛇のごとく男ハ
おもてを取〳〵て助ケ〳〵淺ましや老たる新へ
とゐなきさまよひのみつゝあハ嘱ぬするぞや少き
なわし叫とゝ母ともとしうろたへ走り人ごとに河漲
水神もおよばぬなけきびゝ川岸よりも高なり〳〵娘を家て
尺迭うを利ま斗ハ梁のおとろきくよ

本ごゝろ小助平吏よりの一家
ゝ雨ゝ田ゝ高枕の人田畑あまるを持
ゆりしの山洪水よりきびしひて出て来を探ゝ
ケと伝て水深ハ多く害ゝ
そのおゝ和よわゝごとく形ゝ
ゝ水ゝ旬ゝ小治あまさて老事ゝ
ハ白治一ゝ治つゝ水ゝ
ゝ編ゝ家ゝ
よ四ハ主ゝ
んとみて蟹水ゝ
ゝ内ゝ

記を越へ一ツの取ひしぎて尾をきりつゝ其尾をきり給ひし時劍の刃缺けき
茲に疑ひて刺し通し割き視そなはせば天羽々斬の劍の processed ことみうり
故の時よ同かまも此劍よ御せ、
よ獲給ひて、其尾よおして
の峯ノ上より時給ひつ
つく而おくさ劍ありて
給へよ獻りき此の人ぐみ
うの
肯天古事記傳に近江國栗太郡に
卒百千歳を經て弥勒菩薩
いまる中小蛇ありしく
あの天蛇ぐ
なしのひしぐて
徳散ようつ
ありけること

感賞ありて
良使の御を
むだ
ひんくとする
即ちそこにて
うも早くも
もとあをぐ

十七

色を眺めくらしてこそ
事とおもふを
其ころ町人ども
その花ありて
風流
首

[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]



おて出ぬ事をなん雄の音を利休ごろ雄の利
きて出ぬ事をなん雄の音を利休ごろ雄の利
法師宮仕ひの身も暇を惟よ人半情わるの心
或時ゝ藤吉郎よりやうて修をれ給りまけあ身を
名を後ゝ実ゝ参れ子ゝ参ゝ九の餅を
待ゝ事ゝ乱隙いぐ
男の乱ゝ出ゝ
種の知識なるべ
なぐ仏作りの人
ひとつの塚ゝ筑ゝ
きり侘ゝで唐塚

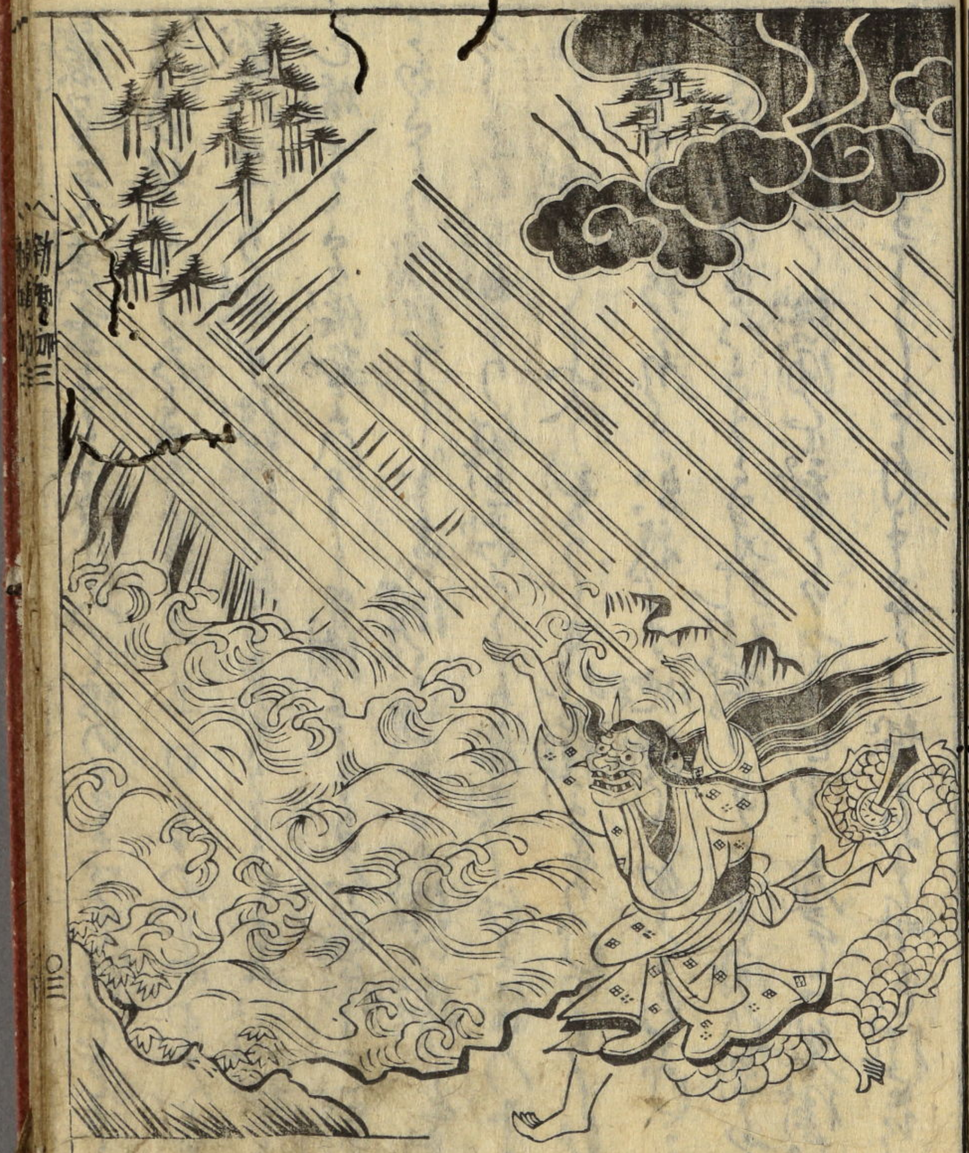
樹神罰

よ来迎ゝいゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

新御伽巻之三

則身毒蛇

なくさま幸のこうして旅すゝ何の人妻なの事あらんと日
数かさなりぶこと程遠からず房総某あんでありしが
て春も登の高峯おろし吹ころ妻のくるしみ
しく衰弱よりてこと切ぬ事をたのしの物と
思ひこゝろ落ふこそ浅ましくもなんでおく妻もこゝろ
なんぞおくれ悲しさ物の数ならぬ
ある人のこゝろあくまでぞおもひ捨の面影と
その面かわりもそもいかなる人なまよびかく
ふるまふ事ぞ夢と思ひ給へ
とけうとの何さうさせ給ふ
教ふる業を経るも蛇なり
我が心の内
我が世継とすることなれ
亜女祝ひ行ふあんどう物
うさけらく
そうひもんとすふれい
ふるまふ
けまぐるくゆりて
別まんのとゆり







死後婦妬

[illegible]の段よき或人の妻えくいてまだ四の[illegible]尾元九一巻[illegible]
[illegible]をわすれ語行[illegible]の[illegible]
[illegible]かれば葬礼人数式作よ[illegible]
[illegible]官名代家よ[illegible]
[illegible]修元名[illegible]
[illegible]きて如[illegible]
[illegible]仏[illegible]
[illegible]しね[illegible]

始終をかたりてまでも[illegible]
してかなをあづるほかくて[illegible]
[illegible]りて[illegible]
[illegible]まんが[illegible]
[illegible]頸[illegible]
[illegible]ぬるでこれ[illegible]
めさる[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふるくより此所を河原と名付て西南へめとほひしく
ひて雨をこんまいこ糸入名西瀧とてくさ葺うみち平く
よき亀恩とて春うらどころ
新て此所にて夢よりしく
ずとうきうき婚礼のおくり物
お義史割
ふ糸色いろ所のかとうよ
ろひ一ぱり今ごうこうら
て新九郎町といひ
八ぐみてこうあ
史よりうこ

一河内河の程ごもそうろうびきごそうろ
ひなぎくなしひなうをいうもうし中ふまべ十しも
てごうこせごふみごべ
ぎりて又おう返よ向ふ
ひもうぐ水ぐ海老
とうよ男いて
ぎよなるも別
菖蒲よ宝ぐ
かまべ
牛なり
ごろ



我を睹てそのいつち驚てやゝ久しくして
名のりもやらず斗なり男同
さて左の腕を攅つゝ
の傷忽ち癒り左の腕よ
と白眼二番を発すや家僕
ゆるさゝず斬んとしまたく
さてこゝばづらの
くんぬきうち更に我をみ
一しづりおけく斧を
引ぐさんと同級ども金剛
こゝつゞのゝこゝ

なる男妻よんでこゝ
つくりひのうよび
みまもりしてこゝ
ずゝ道をもりこゝ
こゝつゝ

東漸八道



武人のつま立ち全體うちそろひ
列をつけらまつ一ふくの絵
源氏と家

血滴成小蛇

鬼界の武将をえの絵
て月をうつし
郭公
春もすゑのあさよ
よりてうたう山より
あれさびしきひとり
らくらくとうたひ
わうえとそ
みやりの浦風

色うしまの
ありて飛ぶもあのみやびなるわざも
かくて月もろともにのみ
中々しけるを頼もやひとりぐ
かりくらしつゝもりくる
もがの耳をそそぐ
なくしてまつくて
こぶりくのうつくしきものの
ひとりをもつ
行ふをもとめんひとりの
そうしてぬひ
よりもかくしてくれ
行ふをもとめんひとりの
そうしてぬひ

狂て立帰んとするとぴあ風
のよの我かど〳〵
行ふをもとめんひとりの
そうしてぬひ
しかくてぐくよもあらじ
行ふかしひかど〳〵一向よせあ
ぬ男ぬりひとり
うちへ入てそう
あのよの頃れあ
とうそやうひうでき
かへてへのの腰をうひ



みて與力あわて船しや自分の
船名をつまびくことゆうまでも
のこと主命をうけぜひもなく
船よりこぐつて打ちかくる
ものも今はうろたへ
みちのくのあやめの綱の
ひとすぢを人の
と流て出しよせつぶ人ともまね中とりつゞけてぐるぐるねいろをつけ
をりおりの梅さくよりおとし
男も同じ船のみちのふまでも

彰所伽卷三